

ここでは日本IDDMネットワークが2005年8月に1型糖尿病の根治をめざした先進的な医療・医学の研究助成を目的に設立した「1型糖尿病研究基金」についてその経緯と実績などを紹介します。

1. 膵島移植の研究者との研究会がきっかけ

1型糖尿病研究基金の創設のきっかけは2004年に日本で初めて膵島移植を実施した京都大学医学部の臓器移植医療部の先生方と私たちとでスタートした小さな研究会（情報交換会）でした。当時、膵島移植は私たち患者・家族に「1型糖尿病の根治」への大きな期待と夢を示してくれました。臓器ではなく、細胞(膵島)だけをしかも細い管(カテーテル)を通して患者の体の最適なところに導入することで失われたインスリン分泌機能を取り戻し、その細胞の生着に成功すればインスリンから離脱できるかも知れないという期待感とともに大きな話題にもなりました。

しかし、一方でその実現にはさまざまな問題のあることもわかってきました。それは実用医療としての技術的問題はもちろんですが、日本での臓器提供者(ドナー)の少なさに加え、免疫抑制薬などの未承認薬の使用、保険未適用など患者の経済的な負担の問題です。それらの問題解決に取り組まなくてはいけないという気持ちは私たちと同時に先生方も同じでした。

こうして先端医療の研究者と患者・家族とが一緒になって問題解決に取り組む、実用的な医療に向けて研究を進めることの重要性を認識しました。私たちは研究者とともに小さな研究会をつくり、情報交換や、協働して行政へのアプローチなどを少しずつ進めました。

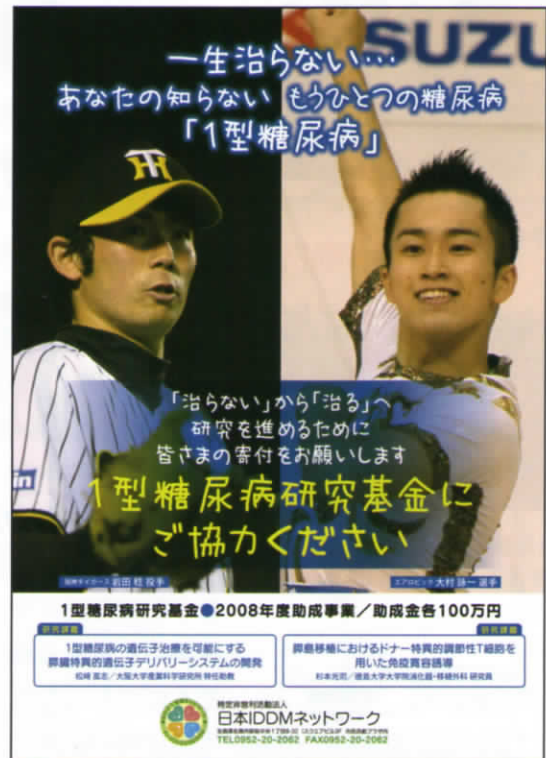
そのような活動の中で先生方から米国1型糖尿病研究基金(JDRF)の存在も知らされたのです。調べてみると第4章-2で紹介されているように同じ1型糖尿病の親がつくった団体ですが私たちとは比較にならない大規模な活動を展開し、その最終目標が「1型

糖尿病を治す」ということだと知りました。そのような時期に理化学研究所の西川伸一先生(第4章-1をご執筆)のご紹介で、日本に來られたJDRFのゴールドスタイン(Goldstein)さんにお目にかかったのです。このようなJDRFとの出会い、そして膵島移植研究者の方々との交流から日本でも患者・家族団体として1型糖尿病を治すための研究支援制度を立ち上げる必要性が、私たちの中では明確になりました。

2. 寄付集めの活動と

初めての助成実績

当研究基金の設立当初、寄付はなかなか思うようには集まりませんでした。私たち自身も寄付集めのノウハウもなく、セミナー、交流会、シンポジウムなどイベント時の参加者への声かけ程度でしたが、3年かけてようやく基金額が200万円に達しました。そして2009年の1月に2件の助成テーマを公募により決定し、



研究基金への協力を呼びかけるポスター